

20 世紀漢民族と靴文化の関係 —1930 年代の女性の履物を中心に—

山内智恵美

I はじめに

清末に始まる 20 世紀は、中国が数千年に渡り築きあげた中華的秩序が崩れ、新しい秩序を探ろうとする中、列強の侵略から逃れるために、あらゆる方面で多種多様な変化が生まれた時代である。古い秩序が消え新しい秩序が生まれる過程で、古い文化が消え去り、色々なパターンを経て新しい文化が吸収された。服飾文化も例外ではなく、臨時大總統の孫文はそれまでの満族式の辮髪や服飾を廃止する命令「今満族の王朝は終わりを遂げ民国が成立した。我々同志は過去の古い習慣を洗い流し、新しい国で国民の一人として出発しよう。i」を下している。服飾文化は、清朝の礼服、官服の類が消し去られ、過去の歴史の遺物として位置付けられ、西洋式の服飾が、これに取って代わった。

本論は、服飾文化というフィルターを通して、中国人特に、漢民族の現実文化や生活を考察するものである。文化変遷を中心に考察する場合、時間的推移に沿い文化の変遷を考えるか、或いは、文化の変遷から時間的推移を遡るという方法が考えられるが。今回は、後者の方法に従った。また、20 世紀靴文化の変遷に焦点を当てたため、漢民族の女性が踏襲した纏足文化が消失し、西洋文化の影響が強く表われる 1930 年代の女性靴文化の変遷を中心に論ずることにする。また靴文化と密接に関係する纏足文化そのものの成り立ちや消失、またその文化変遷に伴う女性たちの社会生活の変遷などについては、多くの碩学が論じている問題であるが、ここでは、靴文化変遷を中心に、その変遷が生じた原因に絞って考察する。

II 靴、そして靴下

1 「靴」と「鞋」

清代末、履物の中で靴と考えられるものは「靴」と「鞋」に分類されていた。形の上から説明を加えると「靴」は現在のブーツと呼ばれる物で、高い脛を持つ。これと比較すれば「鞋(図 1)」は、低い脛の物をさす。「靴」は清代までの官僚の官服に欠かせないものであり、官僚たちは、「朝靴(朝廷に出仕するために着用した履物) 図 2」を着用し、軍服にも用いられた。「靴」は主に雨や雪が降るときに用いられ、「鞋」は日常着との組合せで身に付けるの



図 1



図 2

が一般的であり、庶民や一般人の履物として使用された。

清末まで受け継がれた男性の伝統的な「鞋」の分類には、「梁（前方部につける、盛り上がった線）の有無による分類、「鞋頭（靴先の形）」による分類、そして「底子（靴底）」による分類が可能である。「梁」による分類では、「長梁（線の長いもの）」「短梁（線の短いもの）」「単梁（一本線）」「双梁（二本線、図



図3

3)」などに分類が可能である。「鞋頭」による分類では靴先の形が平らか否か、とがっているか否か、鳳凰などの装飾物があるか否かなどの分類が可能となる。靴底による分類では、主に靴底の厚さと形による分類の他に、底に鋏があるか否か、刺繍がほどこされているか否かなどが可能となる。

これに反し、伝統的な女性の履物を分類する場合には、まず漢民族の女性たちが履いたものと満州民族の女性たちが履いた民族による分類から始める必要がある。ii 満州民族の女性たちは、靴底が厚いものや台座が相当な高さのある「高底鞋」を愛用し、特に若い女性は、「花盆底」（図4）と呼ばれる植木鉢型の台座のあるものを履き、年齢が高くなると「船底鞋」と呼ばれる「高底鞋」を愛用した。台座は白いものが一般的であるが、装飾を施したのものもある。漢民族の纏足をした女性は、特殊な纏足用の「弓鞋」（図5）を着用し、「弓鞋」にもやはり靴底に刺繍のある物から、鋏を打った物やつま先に毛羽立てた短い毛を装飾に使用した物がある。纏足をしていない女性は、上記の男性用の靴と同じようなものを履くのが一般的であった。



図4



図5

民国に入ると、全体的に「靴」を履く者が減少し、「鞋」が主流を占めるようになる。纏足をほどこいた女性と、纏足をしていない女性は「弓鞋」を履く必要が無くなり、iii 男性と同じように正常な状態で履く「鞋」を着用することになる。「靴」は特殊な履物を指す言葉へと変化し、主に靴洞の長い雨靴、軍人用のブーツ、礼服用の靴ivを指すようになる。このことは、「日本の梅雨に適した日本製のゴム長靴は民国十三年来、雨に強く値段も安かったので、吉林省で良く売れ、その当方で百万足以上が売れた。労働者から官吏に至るまで、ゴム長靴を履かない者が無いほどであった。その後冬になると、保温のために、靴洞のあるものを履くものがあったが、軍服用のブーツより靴洞の丈が高いものは無かった。

雨靴であれ、軍服用のブーツであれ、礼靴であれ、どれもが外国から伝わったものであるか直接輸入されたものである」という1934年の『吉林新志』の記載から「靴」の字を当てた履物が特殊な物であることが推測できる。

辛亥革命以後の庶民の履物は、「靴」「鞋」の二分化から「鞋」の言葉がつく「布鞋」「革鞋」「球鞋」「涼鞋」が主流を占める方向で変化する。「民国以前『鞋』は、大方自家製であったが、現在では非常に貧困な一部の農民の履き物以外、自分の家で作られた物を見かけなくなった。地元で作られた物の他に天津や上海製の物も多く見かける」という『吉林新志』の記載は、「布鞋（布靴）」「革鞋（革靴）」「球鞋（運動靴）」「涼鞋（サンダル）」などが1930年代には庶民の履物として主要な位置を占めていたことを物語る。

2 布靴から革靴へ、そして多様化の時代へ

清代において履物は「靴」と「鞋」による分類が可能であったが、本来靴の分類には、形（デザイン）による分類と製造に使われる材料から分類することができるが、材料で分類すると、またの名を「便鞋」と呼ぶ布鞋は、既に殷王朝の時代に麻製や絹製のものがあつたとされ、20世紀初頭になると靴全体の中で多くの割合を占めるようになる。布鞋は、本来靴のすべての部分が布で作られていた。つまり、靴底、靴本体など靴のあらゆる部分が布製であり、且手縫いで作られていた布鞋は、その後1860年代のミシンの出現により製造過程が機械化、工業化され、同時に化学的な材料を加えた布鞋が出回るようになる。靴底の部分にゴムやプラスチック素材を用い、靴本体のみを布で作る布鞋の誕生である。靴底がゴム製の物は、テニスシューズやバスケットシューズなどの運動靴として現在でも製造されている。プラスチック製の靴底を用いた布鞋は、今日ではあまり見かけなくなっているが、1960年から80年代にかけては、都市に住む人々の履物として活躍した。これらの布靴の中で多用されたデザインは三、四種類あり、女性が多用したのは「方口偏帯鞋（片側をベルト止めで靴口が方形）」であり男性（女性にも用いられた）は、「円口鞋（爪先や靴口が円形）」や「懶鞋（靴口にゴムバンドを用い着脱がスムーズにした）」が好まれた。しかし、80年代後半から90年代にかけて布靴は淘汰され、都市の若者の間では着用されなくなる。

布靴が淘汰された後、特に都市において、その地位についたのは革靴（人工革を含む）であった。もちろん社会主義化傾向が強くなり意識された時代、革靴の中でも特に「高跟鞋（ハイヒール）」は、資産階級の生活パターンに結びつく代表として冷遇され、一時期はまったく人々の履物として登場しない時期を迎えることになるが、改革解放時期になり、瞬く間に革靴はその地位を回復し、今日、革靴を持たない人はいない、と言っても過言ではないくらい革靴は人々の間で、最も普遍的な履物としてその地位を獲得している。需要の量に比例し革靴の種類は非常に多用になり、そのデザイン、色、価格差などの幅が広がり、靴の中でも最も種類が豊富な靴へと成長した。デパートの靴売り場には、各種多用で数え

切れない数の革靴が並べられており、靴売り場の主要な面積を占めている。街にできれば、革靴が靴の中でも種類が最も豊富な靴であることを自ずと知ることになる。嘗ての布靴の地位についた革靴は、中国において最も種類の多い、使用度の高い靴に成長した、と言える。

革靴の中で、時代的背景に左右され、強い影響を受けたのが「高跟鞋（ハイヒール）」である。ハイヒールは1927年頃、先ず上海、その後は大都市、そして都市の女性たちの間で流行していく。この頃から、ハイヒールは都市に住む女性たちの好みの履物へと変化していく。『良友』第16巻（1927年5月、図6）には数種類の3～5センチのハイヒール

がとり上げられており、50巻（1930年10月）には27年の物よりさらにピンヒールでヒール丈7センチもある物がみられる（図7）。この時代、既に四季を問わずハイヒールは愛用されたようである。その後30年代以降には夏期には「涼皮鞋」のハイヒールが雑誌上に残されている。



図6

v. ハイヒールの流行は、西洋文化を吸収し模倣しよとする傾向と深い関係があったと考える。ハイヒールを履けば、歩く姿が西洋人女性に近づき、僅かでも身長が高くなることによっても西洋人女性に近づく。この頃、西洋人、白色人種優生論は存在した。『上海漫画』（1928年～1930年）のシリーズ「世界人體之比較」では、優生学、進化論、生態学、美学などに基づいたと読者に思わせる白色人種優生を裏付ける解説が数多く見られる。



図7

すべての白色人種は生まれつき美しい体を持っているだけでなく、栄養にも注意して体を保護し鍛えている。……vi

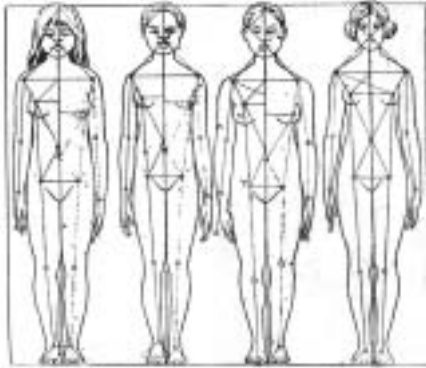


図 8

左側に並べた図(図8)から白、黄、黒、褐の四人種の標準的体格を比較すると、顔面の五官部分の位置に明らかな相違がある事以外に頭部と頸部、肩部を結んだ長さにおいて、白人が最も短く、黒人は白人より僅かに長く、褐色人が黒人より更に長く、黄色人が最も長いことがわかる。我々が絶えず、アジア人の頭部が体に似合わず過剰に大きいと感じるのは、この三つの部分を結んだ長さが長すぎるからであり、体本体と脚の長さが短く感じるのもこれが原因である。肩部の下は胸部であるが、黄色人の乳部は、少し下部にあるため、上半身が過重であることは明らかである。

褐色人も黄色人と同じように(上半身が)過重である。胸部以下、腹部から小腹部にかけて白人が最も長く韻緻であり、他の部分との調和がとれている。腿も白人が最も長く、黒人も長い、褐色人がその次で、黄色人が一番短い。臂部の長短は白人が一番適当で、黄色、褐色人が少し長く、黒人は長すぎる。……vii。

白人の体形の基準から、女性の体の美醜が決められており、中国人女性が西洋人に近づきたいという欲望を起こすのも理解できる。もちろんこの時代は、五四運動自体が反帝国主義的要素から始まり、民族主義の色彩を色濃く残していたため、単純な西洋崇拜や白人優生の側面のみを語ることはできないが、目は世界に向けられていた。外交レベルでは確実に民族主義を貫く一方で、知識階層の意識レベルは世界を捉え、反帝国主義を堅持しつつも、西洋に学ぼうとしていた。社会全体に矛盾は存在したが、服飾に関しては西洋化、世界化、国際化へ移行していった。中国人の服飾文化に西洋文化が与える影響は日増しに大きくなり、上海では租界地で暮らす外国人の服装習慣の影響を直接に受けた。

ハイヒールと同じように20年代後半1928年に、満州民族から受けついで旗袍ではなく、西洋文化の影響を強くうけた旗袍が上海で生まれた。30年代に農作業以外に従事するあらゆる階層の女性に愛用された旗袍も西洋文化、特にアメリカ文化の影響が顕著に表われた衣装であることは、ハイヒールの流行と無関係とは言えない。viii20年代後半から30年代にかけて出版されたの女性雑誌『婦人画報』『玲瓏』『上海婦女』などにも「改良旗袍」にハイヒールを履いた女性が数多く残されている。西洋文化の影響を直接、間接的に受けた上海の女性たちが率先して、透明、曲線、露出した旗袍を身に付け、足元に西洋文化を享受できるハイヒールを履いた、と考えるのは自然な流れである。

都市では流行したハイヒールであるが、一方では強い批判を受けることにもなる。批判

者は、ハイヒールと纏足を結び付け、女性の健康によくない「畸形的鞋」として以下のよう
に批判している。

現在纏足の悪習は既消え去った。しかしよく成長した足に履かせた畸形の鞋—「高跟鞋」
は身につけた人の身体の健全に影響を及ぼしている。もちろん纏足のように極端
ではないが、根本的には同じである。……最も理想的な鞋、自然とは、足の形をより
どころとして作られたものである。ix

「高跟鞋」が「畸形的鞋」として批判されたのは、足を変形させる危険性から纏足の悪
習を思い起こさせることの他に、「礼儀・廉恥」を重視した新生活運動に反していたこと
も要因として考えられる。「健全」を取り戻そうとする運動の中で、当時の雑誌には、水
着姿、運動着姿とともにスポーツに興ずるような自然な躍動美を描いた女性が登場しお
り、「不健全」な物への批判が存在していた。『良友』（1935年1月）101巻には「小家庭
学」と題した家事全般に渡る結婚前の中産階級の女性向けに家庭学が連載され、その中
でも贅沢を求めない素朴で、生活の必要に応じた健全で合理的な家庭生活が紹介されて
いる。服装や靴に関する言及も自然、健全が論じられている。

服装について言えば、女性はおしゃれをして人の目を引くことを好み、モダンな物を
取り入れようとする天性があるようだ。そのため様々な最新流行のデザインが存在す
る。しかし、最新流行のデザインが衛生とうい概念に一致しているかという点とそう
ではない。よって、合理的な婦女子の服装を求めるということは、婦女子の衛生面で
の難題となる。……服装の衛生には大原則が存在する。それは、一切の服装（下着、
上着を問わず）が自然な身体の状態に束縛（とりわけ腰や胸）を与えないものである
という点である。……衣類は軽い物を求めるべきで、あまり重い物は適当ではない。
肩にこりや痛みを感じ腕や肩が疲れるからである。靴も足に適していなければならな
い。ヒールはあまりに高い物は適当でない。足を挫いたり、滑って転ぶからであり、
しかも骨盤がゆがんだり、内蔵の位置まで変える恐れがあるからである。x

しかし、どのような批判があっても20年代後半から40年代には都市においてハイヒール
は流行していた。

50年代以降になると、ハイヒールはそれまでの批判の論点であった「畸形」「健全」と
いう言葉に代表される、デザインや精神上の問題とは別の観点からの強烈な批判をあびる
ことになる。ハイヒールと資産階級の生活パターンが結び付けられ冷遇され、文化大革命
に至り、完全に消し去られることになる。

1950年代以降、全国的に西洋人、特にアメリカ人の影響を消し去ろうとする運動が巻き起こる。ハリウッド映画は批判され、後には放映禁止の処置を受け、ソ連と中国の映画がその地位につく。西洋人の服装やスーツは批判され、旗袍やその他の「資産階級的」とされた古い中国式の伝統的服装も批判された。新たに認められた中国式の服飾が流行し始め、各種の制服が表れることになる。その中で最も有名なものが中山服、人民服、或いはレーニン服と呼ばれた物である。その後には、所謂「毛式上着」と呼ばれる物も流行する。ごく短い間に、人々はハイヒール、毛皮類、アメリカ兵が残したジャケットやその他過去の品物を片付けるかまたは売りに出した。xi

最も極左的傾向が強い時期には、ハイヒールを好んだがゆえに強烈な批判をあびた女性が存在した。彼女は皆から周囲を取り囲まれ、紅衛兵により首からハイヒールをつるされて人々のさらしものにされた。よって、文革期の10年間は、中国大陸においてはハイヒールを履いた女性を探すことは非常に難しかった。他の文革期に消し去られた物たち同様、ハイヒールも70年代に入り、少しずつ市場に出回るようになり、一端出回ると瞬く間にその地位を回復し、ヒールの丈が危険なぐらい高いデザインも出回った。80年代中期以降、西側諸国の間でヒールの高い靴が流行遅れとなる傾向を受け、一定期間中国大陸においてもハイヒールの数量がゆっくり減少し、他の種類の靴へと嗜好が分散し始める。靴自体の用途にも目が向けられるようになり、ハイヒールについて語る時にも、「細くてヒールが高い『高跟鞋』の流行は、時代の潮流であり、その潮流は西洋人が作り出した潮流であり、貴族の潮流である。我々（中国人）は、必ずこの潮流に乗らなければならないのだろうかxii」、とトーンも落ち着いていくが、靴全体の市場を比較すると、中国人はハイヒールを好むようである。一方で健康への影響に配慮する意見も出され、その一方でハイヒールに対する特別な思いが語られる。これらの文章から中国人のハイヒールへの思いの強さが窺えるため、少し長い引用しておく。

今の時代は既に「高跟鞋」の時代ではなくなったようである。「平跟（ローヒール）」「坡跟（厚底ヒール）」「粗跟（太いヒール）」の靴たちが、まるで職業婦人たちの自己解放の決意を表現しているかのようである。気概に満ちた女性たちがさっそうと時代の最先端に行く姿は、細く上品な「高跟鞋」がどの季節の夢であったのかをまるで知らないようである。

しかし私は「高跟鞋」が好きである。精巧、精緻、高貴そして、言葉で言い表すことのできないエロチシズを持つ「高跟鞋」、「高跟鞋」を履かない女性は純粹ではないのである。

やさしくしとやかな古典旗袍には、古い時代の消し去ることができないロマンが内在しており、精細に作られた「高跟鞋」を履いてこそマッチするというものである。乳

濁色、淡いブルーはともにやさしい色であり、(このような「高跟鞋」を履いて)軽快で豊かなステップを踏んででかける良家の淑女たちがいる。女性はこうあってほしいものだ。ロングスカートでもミニスカートであっても「高跟鞋」は欠かすことができないものである。細いヒールで踏まれる足取り、そっと軽く地面に触れる様子は人を虜にする。これこそ女性の特権である。

「高跟鞋」はもう忘れ去られた存在かもしれないが、私はずっと以前から心をよせているので、「高跟鞋」を履いて美しく流行遅れを歩くことを私は何とも思わないし、むしろ望むのである。xiii

今の時代女性たちは靴を買うとき往々にして、個人的なデザイン感を基準に選ぶかまたは、単純に何が流行しているかにのみ注意し、その靴の用途には無関心なようである。その結果女性が足の病気で悩まされる割合は男性をはるかに超えることになる。……身体の健康ということから考えると高跟鞋は足や脊髄に悪い影響を与える。「高跟鞋」を履いた時、人の身体は自然と前屈みになり、まっすぐに姿勢を保とうとするなら後ろに反り返り、これによって背中や骨盤、そして両膝に負担がかかることになる。xiv

90年代後半には、服装が多文化の傾向を迎え、それと共に靴も多文化、多様化の方向に進むが、一方で着実にハイヒールは存在している。時には、ピンヒールではなくある程度の太さのあるものではあったが、男性がハイヒールの靴を履く姿も見かけることになる。

多文化の中で、20世紀の最後の数年に流行したのが、属に「旅遊鞋」「球鞋」と呼ばれる運動靴である。運動靴は革製とズック製の二種類に大別できるが、流行したのは革製の運動靴である。その結果、輸入された外国製のブランド運動靴、例えば Nike、Asics、Puma、Adidas、Reebok など一足千円以上もする運動靴もあらわれた。

この他、30年代より夏期に最も良く見かけるデザインは「涼鞋(サンダル)」(図9)であり、革製、ズック製、布紐製、草紐製などの多種多様なデザインや素材の物が出回ることになる。サンダルより気楽な履物は、突っ掛け草履やスリッパの類で、中国人のスリッパ履きで街に出かける姿もよくみかける。南方の農民は、夏には特に靴を履かないことがある。また草紐の草履は、もともと布靴を買えない者が自分で草を編み作ったものであったが、現在では草製のサンダルは、貧乏な人のためにあるのではなく、流行の服飾品の一つとして数えるものに変化している。



図9

3 靴下

靴下は靴の変遷とともに大きく変化する。19世紀末に靴下と言えば、各家庭で作った布製靴下を指すか、または纏足のために足を縛る布を指し、ごく僅かの金持ちだけが絹製の靴下を着用した。記載によると「民国以前、庶民たちは家族のために布靴下を作ったものであるが、民国期に入ると機械織りの木綿の靴下が次第に増加してくる。今では自家製の布靴下は農村でも既に見られなくなっている。都市では夏期には絹織りの靴下が着用され、冬期には毛織物の靴下が履かれるようになる」「嘗て纏足をした女性たちは、足を布で巻いて縛るか布製の長い靴下を履いたが、今日の女性たちは、夏になれば、靴下も履かず裸足のままになったのである xv」女性の足を包む物は、もとの纏足用の縛るための布から靴下へ変化し、靴下は布靴下から繊維織りの靴下へと変化した。この変化は、女性の生活と言う点からも大きな変化であり、ある意味では進歩と言える。繊維織りの靴下は自然繊維を用いた靴下と化学繊維を用いた靴下に二大分類できる。自然繊維の靴下は、綿繊維織りの物で、白が最も多いが、他の色の物もある。この他に自然素材は、毛織りの靴下がある。化学繊維の靴下はナイロン製の物、これは、多種多様な色の物があり、靴下自体に図案を加えた物も数多く存在する。他には最も多いのが人造絹糸や絹で作られた肌色、そして黒、白などのストッキングであり、ストッキングでは丈長の物も着用され、長いストッキングは先ず黒から始まり、後に明るい色が取り入れられ、肌色、そして白や灰色も着用された。この他に、自然素材と化学素材が混合使用された物も履かれた。

どのような靴下であれ、伝統的な靴下と今日の我々が使用する靴下とは、同じ服飾品の一部に数えることが困難なぐらい全く異なる服飾品であった。

Ⅲ 結びにかえて

20世紀の100年間に中国人の服飾、靴文化の変化は、現状を鑑みるに、西洋化或いは現代化への変化と言える。もちろん各種の変化には、具体的で細微に渡る変化が存在する。本論ではそれらの具体的変化の過程を詳細に叙述することの他に、さらに変化の原因を考察し、それらの変化がもたらす社会的意義を考察するように努めた。例えば、ハイヒールの流行には西洋文化の流入という直接的現象以外に、知識階層を中心とする白色人種崇拜につながるイデオロギー的な意味が含まれている。これらの背景や原因を考察することは、中国現代文化の特徴を明らかにすることにもつながり意義深いテーマである。

しかし、靴文化の変遷は、服飾文化全体の一部として変遷を遂げていることもあり、女性の纏足につながる叙述以外には、靴文化のみに言及した論述も少なく、背景や原因を十分に考察できたとは言えない。今後の課題として更に進めていきたい。

注釈

- i 「臨時大總統関于期限剪辮到内務部令」『中華民国档案資料匯編』（江蘇人民出版社 1981 年）第 2 輯 P.32
- ii 満州民族が入関（山海関）後、男性に満州民族の服装や髪型に従うことを強要したが、女性には、「十不従。……男従女不従。…（十は従わなくてよい。……（その一つ）男子は従わなければならないが、女子は従わなくてよい。）」の非公式な条例のもと、明代からの衣装の着用を許可した。このため、清代末まで満州民族と漢民族の女性は、異なる服飾文化を維持することになる。
- iii 纏足をほどいた後に、女性たちは、男性と同じように靴下と靴を着用し、靴も男性と同じようなものを着用したが、「陰陽混淆」の古い価値観を持つ女性たちは、男性とわずかに異なる形の靴、例えば男性が平らな靴を履けば、女性つま先のとがった形の靴を履くという具合に、男女の区別ができるものを好んだようである。
- iv 1912 年と 1929 年の二度の服制を發布した中華民国であるが、1912 年の服制は参議院が發布した礼服に関するもので、一般礼服二種類と正式礼服を定め、それぞれの礼服に合わせて礼靴を定めている。この時定められている履物に「靴」が使われている。
- v 『良友』84 卷（1934 年 1 月）には「涼革鞋」のハイヒールにミニスカートを身につけた女性スターが取り上げられ、107 卷（1935 年 7 月）には「七月趣味」として「涼皮鞋」がとりあげられている。
- vi 「世界人體之比較（十九）」『上海漫画』第 38 期（1929 年 1 月 5 日）上海書店出版社 影印版
- vii 「世界人體之比較（二十四）」『上海漫画』第 47 期（1929 年 3 月 26 日）同上
- viii 20 年代後半に上海で生まれた旗袍のその後の変遷については、拙著「旗袍からチャイナドレスへ」『アジア遊学』（62 卷、勉誠出版）を参照。
- ix 趙竹光「高跟鞋对于婦女健康之影響」、『東方雜誌』第 31 卷 19 号（1934 年 10 月）P.208 - P.209
- x 孫家奇「婦女衛生」『婦女月刊』第 2 卷 1 号（1942 年 6 月）P.37
- xi J. K. Fairbank・R. Macfarquhar『劍橋中華人民共和國史（下卷）』（中国社会科学出版社、1990 年）P.721
- xii 丹娜「這一輪『小尖錐』浪潮，你趕嗎？」『中国青年報』1997 年 8 月 30 日
- xiii 王秀峰「寂寞高跟鞋」『服裝時報』1997 年 11 月 21 日
- xiv 趙繼紅「女性不宜常穿高跟鞋」『鞋帽世界』鞋帽世界雜誌社 1995 年 12 月 P.31
- xv 『吉林新志』（1934 年）参照。

图表出典一覧

- (図1) 葉大兵、錢金波『中国鞋履文化辞典』(上海三聯書店 2001年10月) P.11
- (図2) 葉大兵、錢金波『中国鞋履文化辞典』(上海三聯書店 2001年10月) P.11
- (図3) 葉大兵、錢金波『中国鞋履文化辞典』(上海三聯書店 2001年10月) P.12
- (図4) 高春明、周迅『中国歴代婦女裝飾』(学林出版社 1991年10月) P.289
- (図5) 高春明、周迅『中国歴代婦女裝飾』(学林出版社 1991年10月) P.307
- (図6) 『良友』16卷(1927年5月 良友印刷公司 影印版 上海出版社)
- (図7) 『良友』50卷(1930年10月 良友印刷公司 影印版 上海出版社)
- (図8) 「世界人體之比較(十九)」『上海漫画』第38期(1929年1月5日上海書店出版社
影印版)
- (図9) 『良友』107卷(1935年7月 良友印刷公司 影印版 上海出版社)